

カフカの「城」に関する試論(17) : 村長と教師をめぐる覚書

著者	芳野 昇
雑誌名	日本歯科大学紀要. 一般教育系
巻	27
ページ	1-8
発行年	1998-03-20
URL	http://doi.org/10.14983/00000477

カフカの「城」に関する試論

XVII. 村長と教師をめぐる覚書

Versuch über Franz Kafkas Schloß

XVII. Notiz um den Dorfvorsteher und den Lehrer

新潟歯学部 芳 野 昇

Noboru YOSHINO: The Nippon Dental University, Hamaura-cho 1-8,
Niigata 951, JAPAN

(1997 年 11 月 27 日 受理)

1.

Kafka の作品『城』(Das Schloß) において主人公 K との関係という視点から進められてきた、主要な登場人物をめぐる筆者の覚書も、いよいよ残された対象は城に支配されている寒村での村長と小学校教師、そして宿屋の女将ということになろうか。

この村長と小学校教師は K には日常的に対応しながら、測量技師として村での定住を希望する K の生活への意欲をどうやら阻もうとする共謀者としてまず理解されよう。

本稿ではこの村長と小学校教師とに焦点を合せて、その形姿を原典に即して分析し、覚書する。

2.

2.1. 第 2 章で使者 Barnabas が城から言付かって、直接 K の下へ持参した X 庁長官 (der Vorstand der X Kanzlei) の手紙、この手紙はやはり長官 Klammer の署名入りだと考えられ、「貴殿 (K) の直属の上司は (Ihr nächster Vorgesetzter), 貴殿の仕事とその

報酬条件についてのすべて詳細を (alles Nähere über Ihre Arbeit und die Lohnbedingungen) も貴殿に通知するだろうし、貴殿の方もまたその説明をする義務があるであろう (Rechenschaft schuldig sein werden), この村の村長 (der Gemeindevorsteher des Dorfes) なのです。』¹⁾と記されてある。個人的なのか、公的なのかも不明確でもあり、首尾一貫していない文面ながら、少なくとも村長がKの直接の上官であり、文面通り理解すると、この村長にKは事の次第を一切報告、釈明する義務を負っていることになる。まずこの村長 der Gemeindevorsteher des Dorfes の表現は、作品中では他に Dorfvorsteher, Vorsteher と叙述されていて、従って長官 Vorstand はこの村長の上司、Klamm を表示していると考えられる。どうやらこの村長の形姿は長官 Klamm に直属する、村の行政執行者で、一面村の実務を握る中間管理職的役人像が反映していると考えられよう。土着の人間で、小役人から叩き上げられ、実績をあげた立身出世型、晩成型の役人のイメージが重なり合って、愚直であると同時に、老練な人物、小心翼翼として、つまりは上意下達にのみ固執する無能な役人の典型が予測できよう。少なくとも半官半民の災害保険局で20年近くも勤務した作者 Kafka の上司や同輩にその類型を見い出すことも容易であろう。ともかくKはだんだん埒があかない事態に閉口して、早急にこの村長との面談を求め、果敢に会談を試みるのであった。

2.2. 第5章は「村長のところで (beim Vorsteher) <という副題が付けられている。この章の冒頭でKはまずそれまでの自分の行動 (むしろ闘い) を、城当局 (Behörde) の任務と、つまり> 絶えず遠く離れている不可視な役人達の名において、遠く離れた不可視な事柄を守らなければならなかった (die Behörden hatten, so gut sie auch organisiert sein mochten, immer nur im Namen entlegener unsichtbarer Herren entlegene unsichtbare Dinge zu verteidigen) <²⁾当局の間接的に管理する権力とを対比させてはばからなかった。何よりもKの行動は「何か実に生き生きした身近な事のために (für etwas lebendigst Nahes) 闘うことであり、自分自身のための (für sich selbst) 闘いであり、その上に少なくとも一番最初は自分の意志から (übrigens zumindest in der allerersten Zeit aus eigenem Willen) の闘いであり、いわゆる彼 (K) は攻撃者 (der Angreifer) であった。』³⁾と作者 Kafka は判定している。となると正しく長官 Klamm とは異なって、眼前で対談 (Besprechung) できる村長こそはKにとってもつけの幸いであり、好都合な論敵として登場させているのであろう。そしてKと村長との接点から立証される事は、筆者は後に総括的に論述する城と村との関係、あるいは役人と村人の関係、つまりこの村での職務と生活 (Amt und Leben) との関係で明らかにされるのである。

橋亭の女将 (Wirtin) に村長のところで重要な相談 (eine wichtige Besprechung) が

あると告げて、村長の部屋に勢い込んでやって来たKを、他ならぬベットの中で村長はKを迎えたのだ。「村長 (der Vorsteher) は好意的で太って、髭をつるつるに剃った男で、病気であり (ein freundlicher dicker glattrasierter Mann, war krank), 重い痛風発作に (einen schweren Gichtanfall) 罹っていた。」⁴⁾ 老いた男性ながら、愛想がよく、太っていて、さっぱりと顔を剃りあげていて、一見健康的な人物が想像できるのに、病気で重症の痛風持ちだという。正に作者 Kafka 一流の矛盾形容法である。概してこの作品『城』の中でとりわけ村人は病気がちに描写されている。まず御者の Gerstäcker, 少年 Hans の母、つまり城の娘で、Brunswick の妻、それに使者 Barnabas の両親、父親の方は村長と同様に痛風病みで、どうやらこの東欧の寒村に原因する風土病とも考えられよう。寡黙で、かつ黙殺されている風物の中に生活する村人達の特徴である、無自覚さや虚脱感、あるいは長く権力に使いこなされた疲労感こそがこの土地に蔓延する病気の一種なのかも知れない。

2.3. 村長はKに自己紹介して次のように自分の本性を言明している。「その上私は満足な役人ではありません (nicht genug Beamter), 私は農夫 (Bauer) で、それから (農夫の本性から) 離れられないのです (und dabei bleibt es)。」⁵⁾ 村の小百姓から成り上がって、村長にまで出世したが、性根は農夫にすぎなく、根からの土地の百姓で、今となっては村の実体に熟知した人物ある。長官 Klamm を代行し村の実務を司ってはいるものの、その実像は不可解でもあり、実権のないまま書類の山に徒らに埋もれていて、その書類処理は部下の小学校教師と妻の Mizzi が担当しているのである。ただ異邦人 (Fremde) であるKをあくまでも排斥する村の現体制を死守しようとする、いわゆる守旧派の頭目であり、急進的な改革派を自負する、城の娘を妻に持つ村人 Brunswick とは数年来反目し、対立している人物である。つまり当面の測量技師招聘問題では絶えず 残念ながら、私達は測量技師を必要ないのです (leider, wir brauchen keinen Landvermesser) ⁶⁾ と主張つづけて止まない愚直な程に頑固で老練な男性が想像できよう。そして 彼 (村長) が貴方にさしあたり学校の小使の地位を提供すると申し立てます (er bietet Ihnen vorläufig die Stelle eines Schuldieners an ⁷⁾), とKを測量技師としては認めずに、さしあたりは部下である小学校教師に従属する学校の小使の職をKに押し付けようと、教師を通じて指令する、強かに事柄を画策する策謀家でもある。もちろんKがこの小使の地位に不満足で、不適任であることを承知の上で、いたずらに無為無能に教室で過ごし、ひたすら混乱のみを生み出すKを予想してか、この小使の地位からも待ち構えていたごとく、Kを最終的には解雇 (entlassen) へと教師を介して追い込む、老獪な村のフィクサーなのである。

2.4. ただかつて長官 Klamm の情婦であったと自称する橋亭の女将だけは、この村長

の無能さを言明してはばからなかったのである。「あの村長は決して重要人物でないのです (eine ganz belanglose Person)。貴方は一体そのことに気付かなかったのですか。万事すべてを面倒みている彼 (村長) の奥さんがいなかったなら、自分の地位 (村長の地位) に一日だってとどまれないでしょうよ (Er könnte keinen Tag in seiner Stellung bleiben, wenn nicht seine Frau wäre, die alles führt)。」⁸⁾ 女将によればまるで実務を村長の妻 Mizzi が握っていて、K への村長の対応は何の意味もない (Keine Bedeutung)、見せかけのものにすぎないという。こうした全く逆の側面からの人物批判は作者 Kafka が多用する描写法の一つでもあり、ただ村の実態に熟知した女将の一面至当な助言も、この時点では K には理解できなかったらしい。

2.5. この村長の形姿には長官 Klamm の持つ直かに面談もできずに、ただ巨像として支配的な抽象的存在とは異なって、作者 Kafka の勤務した当時の半官半民の災害保険局の上司像とも重ねてみることができるが、やはり『判決』(Das Urteil) や『変身』(Die Verwandlung) に代表される父親像、他ならぬ実父 Hermann Kafka の実像とも重ね合わせてみる必要があるであろう。これらの父親像に共通する、主人公 Georg Bendemann や Gregor Samsa の日常に立ち塞がる実在、何よりも息子 Franz Kafka の人生に威圧的に執着した父親 Hermann Kafka の、とりわけこの作品『城』執筆時の老いゆく父親の姿、生来の頑固な一徹さに加えて、息子への愛着と情念とに満ちた好好爺像をも合わせて込められていよう。

2.6. 一方、村の小学校教師 (der Lehrer) は第1章に早くも登場する。夕刻遅く城のある村に到着した主人公 K は、翌朝、眼前に遠方する城の光景に幻滅しながらも、雪道の村を徘徊していると、村の教会の裏手に小学校に突き当たった。この村の建物に共通した特徴である暫定的な側面と非常な年代的な側面とが奇妙に調和した、低く長い建物が村の学校であった (ein niedriges langes Gebäude, merkwürdig den Charakter des Provisorischen und des sehr Alten vereinigend)。ここで村の生徒達に囲まれて村の教師と K の出会いの場面が展開される。

「この教師は若く、小柄で、肩幅の狭い人間で (ein junger, kleiner, schmalschultriger Mensch)、しかしこのことは滑稽な (lächerlich) ことになったということはないが、非常に姿勢を正して直立して、K をすでに遠方から注視していたのだった。確かに彼の (教師を囲む) 一群以外に見渡す限り K が唯一の人間 (部外者) であった (der einzige Mensch)。」⁹⁾ 異邦人として (als Fremder) K の方からまず初対面のこの小柄な若い小学校教師に「今日は先生! (Guten Tag Herr Lehrer) くと声をかけることにした。まるで閉鎖的な村社会における教師が一般的に持つ、幾分か、むしろ大いに横柄で、かつ権柄づくで、上意下

達を心得た人物で、往往にして慇懃無礼な教師の性分をKは看破しているようではないか。ただ村に到着早々の緊張感とすでに抱いた一種の幻滅感の中で、異邦人のKは新しい知己 (neue Bekanntschaft) を求めたい感情が募ったのか、思わずこの教師に、城の存在、城の所有者という Westwest 伯爵のこと、そして教師の住所さえも問い正すが、いずれにも打ち解けようとしなく、ひたすら警戒心を帯びた教師の態度に、いささかも会話は展開されずに、ついにKはこの村に到着してから初めて本当の疲労感 (wirkliche Müdigkeit) におそわれる羽目になったのだ。

2.7. そもそもK自身の少年時代での学校教師への思い出は決して好意的なものではなかったようで、第2章で Barnabas といっしょに雪原を歩きつづけて、出会った村の教会と故郷の教会を重ね合せて、少年時代のことをKは回想している。少年の好奇心から教会の墓地の塀をよじ登って、征服欲にそそられ、幼な心に勝利感にひたっていると、偶然とはいえ運悪く教師が通りかかって、怒った眼差で (mit einem ärgerlichen Blick) Kを追いつけたので、Kは跳び降りた際に膝に怪我をした (beim Absprung verletzte sich K. am Knie) <¹⁰>思い出があった。他ならぬ作者 Kafka 自身の小学校時代を推定してみると、ユダヤ系住民の生徒とプラハ市民層の教師の構図からしても、当時の社会構造の中では決して個人的にはほほえましく、親密な関係というよりは、概して違和感、むしろ差別感が介在した関係であったとは容易に想像できよう。

2.8. さてこの村の教師を村長が「(村の) 書類整理のために手伝い (für die schriftlichen Arbeiten noch eine Hilfskraft) として雇っているが、処置できずに、いつも多く未処理のまま置き去りにして (es bleibt immer viel Unerledigtes zurück), それはあの箱に集められている」¹¹⁾、と第5章でKとの面談によって明らかにしている。こうした村長と教師の職務関係をKは自らの測量技師採用問題がいつまでも未解決のまま宙吊りになっている現状の反映であり、その元凶と認識してか、「この土地 (村) ほど職務と生活とが絡み合っている所はどこにも見たことがなかった (Nirgends noch hatte K. Amt und Leben so verflochten gesehen wie hier)」¹²⁾、と驚いて、半ば観念してか、この村でのその最たる現象に直面してKは当惑するのである。ともかく公的職務と私的思惑とが混在し、交錯しているこの寒村では、故意とも無責任ともいえる未処理の書類の山で城当局のみならず村長の部屋も埋まっているという。もちろん作者 Kafka が勤務していた当時のプラハの労働災害保険局の半官半民の事務機構の実情を風刺した叙述であると同時に、他ならぬこの学校教師は村長の片腕、あるいはプレーンとして、村の測量技師招聘問題反対の急先鋒であることは疑いない。

2.9. 第7章は>教師 (der Lehrer) <のタイトルのついた章である。村長との会談を

終えたKに反してか、他ならぬこの教師が橋屋の2階で Frieda とテーブルに腰をかけて、Kを待ち構えていた。前日に教師へいつか訪問しますとKは言っておきながら、その訪問を果さずにいると、どうやら教師の方が待ち切れずにKのところに自らやって来たらしい。こうした教師の不意打ちに、先程まで女将と話し合っていて、まだ落ち着きを取り戻していないKはまず弁解しなければならぬ羽目となった。ともかく教師は村長の命を受けて、むしろ駆り立てられるようにKの所へやって来て、教師の言葉を借りると「誠に寛大な決断 (wahrhaftig generöse Entscheidung) <によって、村長はKを一時的に (vorläufig) 学校の小使の地位 (die Stelle eines Schuldieners) を提供する、という伝言をしてやってきたのである。¹³⁾ つまりKはこの教師の直属の部下として働くことになるのだ。もちろん教師にしてみれば二つの教室しかない校舎で、小使の仕事の心得もないKを、Frieda と二人の助手と一緒に受け入れることは空間的にも不可能なので、上司の村長のこの伝言を内心はしぶしぶ伝えにやってきた訳でもある。それ故にKが即座に「その職を (die Stelle) を受けることに私は気が進みません」と言う、教師は「立派、立派 (vorzüglich)、全く貴方は留保なしに (ohne Vorbehalt) 拒否されました」と帽子を取って、腰をかがめて会釈をして立ち去った。¹⁴⁾

ところがしかし、この橋亭をすぐに出て行かねばならないKと Frieda にとっては当座はこの不快な村長の申し出を受けねばならない定めとなるが、Kはひたすら教師の御大層な態度だけが (nur die Grobtheit des Lehrers) 我慢ならず、謹厳実直を気取る高压的で排他的な教師に腹をすえかねるのであった。そして少年 Hans の父 Brunswick が以前より村の測量技師招聘要求をしていたことを聞き知り、つまり村長と教師が結託してKを城当局に近づかせないで、無理矢理小学校の小使にさせてしまったのは、明らかに欺瞞的行為であるとKは判断するのであった。

2.10. この小使の職もたとえ一時的だとしても、そもそもKに相応しい役目では決してなく、もちろんKにとっては一面望むところであるが、早速、解雇が取り沙汰されることとなる。ただ常套手段で、肝心の解雇通告が曖昧なのである。この問題はお役所仕事の杜撰さというよりは、教師の故意によるようだ。当のKは教師に敢えて問い正すのである。「解雇通知がなされたのか、なされなかったのか、その事を正に私は知りたい (gekündigt oder nicht gekündigt, das eben will ich wissen)。¹⁵⁾ やはり城当局のKに対する処遇の真意を測りかねてか、村長と教師は本音とは別に、彼等も対応をいまだに決断しきれずにいて、ひたすらK自身からの自発的な仕事の放棄を待ち望んでいたにちがいない。ただKの方では教師に対する自分の立場を明らかに心得ているのである。「余りに大きな譲歩によって教師の奴隷や身代りになってしまいかねない (durch allzugroßes Nachgeben

sich zum Sklaven und Prügeljungen des Lehrers machen würde) ことが分ったが、ある種の限界まで今は耐えて教師の気分を甘受しようと思った (aber bis zu einer gewissen Grenze wollte er jetzt die Launen des Lehrers geduldig hinnehmen), というのはすでに明らかになったように、教師も合法的に (Kを) 解雇できなかった (rechtmäßig nicht kündigen konnte) としても、耐え切れないまでに (Kの小使の) 地位をきつと苦痛に満ちたものにさせることが彼 (教師) はできたからだ (gualvoll bis zum Unterträglichen konnte er die Stellung gewiß machen)。しかしこの職はKにとって今や以前よりはより十分なものであった (aber gerade an dieser Stellung lag jetzt K. mehr als früher)。]¹⁶⁾ 正にKと教師の腹の探り合いが展開され、実に両者の心理と感情の渡り合いが的確に叙述されている。

やがて Barnabas 一家に関心を持ち、しだいに入り込んでいくKに愛想をつかし、厄介者の二人の助手と共に肝心の Frieda が離れ、ただKの方は相変らず城当局との連絡を求めて、今度は秘書の Bürgel との面談へと進展していく途中で、ついにこの作品『城』の執筆は放棄され、未完のままで終わってしまった。それ故に主人公Kと教師との関係も中途半端のままで残されてしまったといえよう。

3.

作品全体としてまず M.Robert が指摘しているように¹⁷⁾、他の主要人物と異なって、村長と教師は名前がなく、ただ不特定の人物として肩書のみで叙述されていることは見逃してはならない。

結論的には主人公Kにとっての村長と教師の関係は、他ならぬ Frieda が総括的に次のように作品中で感慨を込めて述べている。「私のために、この私のために貴方は心配しなくてはならなくて、貴方は職 (deine Stelle) のために闘わねばならなくて、村長に対しては不利な立場に (im Nachteil) 居られたし、教師には御自分を屈服 (unterwerfen) させなければならなかった」]¹⁸⁾、と村長と教師に対して屈辱的な立場にあったKに同情している。少なくとも作者 Kafka の伝記的視点から考察すると、この『城』執筆中の病弱で、勤務を休みがちな Kafka に対して、古参の上司は決して心よく偶していたとは到底考えられない。ましてやユダヤ人 Kafka に対するチェコ人の上司を想定すると、当然、民族的偏見が存在したことも推定できよう。異邦人で、執拗に村で定住を求めて止まないKの生活の姿勢、むしろ生活の論理は、病氣と執筆の狭間にあって、あくまで20年勤続年金を確保し、そのために勤務を全うしようとする、正に生活者の意欲と権利をも求めて

止まない Kafka の信条に他ならない。一方、できるだけ早期の退職、あるいは解雇を目論む上司（あるいは当局）の構図が読み取れよう。何よりも主人公 K をめぐる村長と教師の形姿には作者 Kafka の晩年の現実が反映され、縮図されて描写されているともいえよう。

Anmerkungen

- 1) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 40.
- 2) Ebd. S.92.
- 3) Ebd. S.92f.
- 4) Ebd. S.94.
- 5) Ebd. S.96.
- 6) Ebd. S.95, oder S.100.
- 7) Ebd. S.145.
- 8) Ebd. S.138.
- 9) Ebd. S.19.
- 10) Ebd. S.50.
- 11) Ebd. S.98.
- 12) Ebd. S.94.
- 13) Vgl, Ebd. S.145.
- 14) Ebd. S.146.
- 15) Ebd. S.239f.
- 16) Ebd. S.240.
- 17) Vgl, Robert Marthe: 古きものと新しきもの, 城山良彦訳, 法政大学出版局, 1973, p.254.
- 18) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S.247.

尚, 引用文の () 内は原文に即した筆者の補注である。